

第173回国際研修に参加して

美祢社会復帰促進センター矯正処遇部
首席矯正処遇官（処遇第二担当）木村 弥生

1 はじめに

令和元年8月20日から同年9月20日までの間、国連アジア極東犯罪防止研修所において実施された第173回国際研修に参加させていただきました。

このような貴重な機会を与えていただけたことに、まずは関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに、以下に簡単ではありますが、研修を通して経験したことや感じたことについて記載させていただこうと思います。

私自身、この研修の対象者として選ばれるまで、国連アジア極東犯罪防止研修所のことをほとんど知らず、また、このような研修があることすら知らなかったもので、本稿が、同研修所に興味のある方々にとって、何かの参考になれば幸いです。

2 国連アジア極東犯罪防止研修所について

国連アジア極東犯罪防止研修所は、通称「UNAFEI」又は「アジ研」と呼ばれていますが、実は、私自身、研修が始まるまで、「UNAFEI（ユナフェイ）」という通称は知りませんでした。

しかしながら、研修中は、誰もが「UNAFEI（ユナフェイ）」を写真撮影の際の合言葉として用いることを通して、親しみのある言葉にしてきたせいか、今では「アジ研」と呼ぶことにすら若干の違和感がありますので、本稿では以下、国連アジア極東犯罪防止研修所をUNAFEIと記載します。

施設の概要は省略しますが、今回の研修では、約2年前に移転されたばかりのこの新しいUNAFEIに5週間滞在することとなり、毎日ホテルのように清掃される清潔な居室（個室、ユニットバス付き）が提供され、洗濯機・乾燥機が設置されたランドリーのほか、図書館、ジム、懇親会スペース（ラウンジB）が何時でも自由に使用でき、さらに、1日3食ボリューム満点の食事が提供される食堂を利用しながら快適に過ごすことができました。

講義開始時刻もそこまで早くなく、朝の時間に余裕があったことと、3食の食事のボリュームが私には多かったため、私は毎朝ジムで30分から1時間程度のランニングをしてから朝食のために食堂に向かっていたのですが、

毎朝走る習慣を身に付けていたことで、とても健康的に生活できたと思っています。

3 研修内容について

(1) 研修の目的

本研修は、UNA FE I 設置の趣旨に従い、独立行政法人国際協力機構（JICA）の海外技術協力計画に基づいて、同計画対象諸国及び国内からの参加者を求め、主要課題について検討することにより、日本及びアジア地域を中心とする諸国における犯罪の防止及び刑事司法の充実・発展に寄与するとともに、関係諸国民の相互理解の促進を図ることを目的としています。今回の主要課題は、「女性・子どもに対する暴力事犯者の再犯防止に向けた処遇」でした。

(2) 研修の概要

参加者は、アジア諸国、アフリカ、南米等16か国から17名の海外参加者と、裁判官、検察官、矯正関係職員、保護関係職員などの国内参加者5名で構成され、約5週間にわたる研修期間中、前記主要課題に関する海外参加者及び国内参加者による個別発表（プレゼンテーション）、グループワーク、国内外の専門家による講義のほか、刑事司法関係機関等の見学を含む国内研修旅行や保護司宅の訪問を通して、知識や見識を深めたほか、各国の相互理解を深めることができました。

(3) 研修を通して感じたこと

ア 個別発表

実は、研修が始まる以前から、この個別発表（研修開始から約1週間）に備えた準備をします。研修開始の1か月前頃までには、主要課題に基づき、自己の所属する分野における現状・問題点及び対策などをあらかじめ英文原稿で作成しておかなければなりません。しばらく英語から離れて生活していた私にとって、現職と両立しながら、約3週間で英文原稿をA4用紙で最低8ページ作成することは至難の業で、四苦八苦しながら書き上げた記憶があります。また、プレゼンテーション資料も12スライド分、当然英語で作成しなければならず、これまで英語でパワーポイント資料を作成したことすらなかった私にとっては、現職と両立しながら、1週間程度でパワーポイントスライド（と読み上げ原稿）を作成することが辛かったような記憶があります。

タイミング悪く、この準備期間は、協議会や出張、施設内行事、監査対応、人事評価・・・と様々なイベントと重なってしまい、とにかく時間との勝負でした。

そのような苦難の末に完成した原稿と資料を片手に、研修が開始されて間もなく、英語による個別発表を行ったのですが、準備期間の苦勞に比べれば、15分の発表時間はあっという間に終わってしまいました。しかしながら、その後の質疑応答の時間には多くの質問やコメントが寄せられ、研修参加者に興味を持ってもらえたことを実感できた、とても充実した時間となりました。

発表の内容は、私が所属する美祢社会復帰促進センターの紹介と、同センター在所中の12名の女子受刑者を対象に独自に実施した児童虐待や暴力に係るアンケート調査や面接調査の内容や、彼女たちの処遇状況についてでした。

他の研修参加者の個別発表も、国内外問わずとても興味深いものばかりで、真剣にノートを取りながら聴講しましたが、さらに知りたいと思えることが多く、質疑応答の時間には質問せずにはいられませんでした。

また、その他として思い出深いのが、国内の研修員5名がそろって、質疑応答に対応するため、カンファレンスルームの前方に座ったことです。国内のどのような機会であっても、裁判官・検察官・矯正関係職員・保護関係職員が一行に並ぶことはなかなかないので、このような貴重な体験ができることに心の底から感動しました。



イ グループワーク

個別発表が終わると、グループワークが始まりました。3つの班が編成され、海外の客員専門家や研修所教官の指導の下、班別に①女性・子どもに対する暴力事犯者に対するEBP（エビデンス・ベースド・プラクティス）に基づいた処遇策の導入や促進について、②女性・子どもに対する暴力事犯者の社会復帰・再犯防止を推進するための多機関連携について、③女性・子どもに対する暴力事犯者に係る非拘禁措置について

て、といった各テーマについて検討しました。

私は①のEBPに係るテーマに基づくグループに加わり、7名のメンバーや指導教官等とともに、最終日に行われる発表に向けて討議を行いました。1回2時間程度を1回として9回分しかなく、この中で、EBPを導入済みの国もそうでない国も含めて、EBPとは何かを整理するところから始め、全体的な発表の方向性を見出し、英文原稿を5ページと発表用のパワーポイント資料の作成を行わなければならなかったため、時間は足りるはずもなく、共通の通信用アプリやメールを用いて情報を共有し合い、また、研修所内の図書館等で夜間や休日に随時集まるなどして、共同作業に取り組んでいました。私は、副書記としての役割を担当したため、パワーポイントの資料作りに全力で取り組みました。

私のグループでは、議長の意向もあり、最終日に全員で発表することとなったため、各自の役割を分担した後、リハーサルを経て、本番を迎えました。質疑応答を含め、発表時間が終わると、とてつもなく大きな達成感を味わうことができました。



ウ 専門講義

研修中、UNAFEI教官や国内外の専門家による講義が行われ、日本の刑事司法制度等について振り返る機会をいただくとともに、児童相談所や科学警察研究所、大学教授の講義など、普段は聴講することのできない貴重な講義を聴講することができました。また、海外の専門家による講義を通して、諸外国の性犯罪者等への対応を知ることができたほか、EBPの重要性を再確認することができたのは大きな収穫でした。たとえ国が違っても、日本が目指していることと同じものをカナダやタイ、ナミビアでも目指しており、加害者処遇を充実化させることで、円滑な社会復帰を目指し、さらには再犯防止を実現させるというものは共

通の目標でした。遠く離れた国々であっても、民族や文化が違っても、ゴールが同じであることに感銘を受けました。



エ 研修旅行等

研修の後半になると、更生保護施設であるウィズ広島、大阪刑務所や京都少年鑑別所を始め、原爆ドームや伏見稲荷などを訪問する、広島・大阪・京都への研修旅行がありました。そのほかにも、法務事務次官主催のレセプションパーティーや、山梨県警察本部や東京保護観察所の見学に参加したり、渋谷の国連大学の学祭や高円寺の阿波踊りを楽しむなどしました。

広島・大阪・京都への研修旅行では、20名を超える大人数での移動であったため、バス移動ならまだしも、新幹線移動が無事達成できるかが、日本人研修員の間でも不安要素ではありましたが（週末の都内各所への移動の際に、電車の乗り換えに失敗する者がいたほか、迷子になる者がいたため。）、意外にもトラブルはなく、朝早くの集合時間に遅刻する者もおらず、短時間の昼食時間となっても、出発時間に遅れる者もおらず、チームワークを如何なく発揮して楽しむことができました。

研修旅行中は、広島や大阪で夕方以降に自由時間があつたため、各自で食べたいものを食べに行ったり、大阪城観光や買い物など行きたいところに行ったりしていました。海外からの研修員は、基本的に活動的でエネルギーッシュな方が多かったので、中には、行き方さえ教えれば、一人で広島駅前から宮島へ午後6時以降に向かう者もいて、ひたすらその行動力に感心した記憶があります。



オ 保護司宅の訪問

研修中盤の週末（土曜日）には、保護司の方のお宅を訪ねる機会がありました。複数のグループに分かれて、都内各所の保護司の方のお宅を訪問しました。

その週の前半には、保護司国際研修出席のため、日本全国からUNA FEIにいられていた保護司の方々による講義が我々研修生に対して行われるとともに、交流会も行われ、海外からの研修員が、日本独自の保護司制度に非常に感銘を受けている状態での訪問となったので、自国に持ち帰りたいという思いを胸に、多くの質問が飛び交い、通訳役の日本人研修員は、おそらく私に限らず苦勞したのではないかと思います。

「無償なのに続けられるのはなぜか」、「どうしてそのような熱意をもって保護司として働くことができるのか」、「自分の家に加害者を呼ぶのは怖くないのか」等、海外研修員により様々な質問がなされましたが、保護司の方には懇切丁寧に対応いただき、当日の昼食も、たくさんのごちそうを用意いただいていたり、お土産が用意されているなど、一つ一つの気遣いに、温かい気持ちになりました。このような保護司の方々の支援が、罪を犯した者が立ち直ることができる一助となっていることを再認識するとともに、彼らの気概に改めて感銘を受けました。

カ その他のレクリエーション等

研修期間中、夕方から夜間にかけて、様々なレクリエーション等が用意されていました。例えば、日本語レッスンは研修前半に3回実施されましたが、日本語で自己紹介ができるようになりたいと、海外研修員は積極的にレッスンに取り組んでいました。日本語レッスン後は、「オハヨウゴザイマス」や「オツカレサマデシタ」など、不思議なイントネーションの日本語が研修生活中、節々で飛び交うようになりました。しっかりと自己紹介文を覚えていた者は、研修中、各種懇親会の場でフルに活用していました。

そのほかにも、平日の夜には卓球大会や茶道体験、各種パーティーなどが予定されていたほか、研修員同士で立川に買い物に行ったり、昭島のスーパー銭湯に行ったり、裁判所内を見学したり、もんじゃ焼きを食べに行ったりなどして過ごし、休日には浅草・秋葉原に行ったり、鎌倉や高尾山に行ったり、富士山にまで旅行するなど、一人になる時間はこの約5週間の研修中、ほぼ皆無でした。

また、第173回国際研修のオリジナルキャラクターをプリントしたオリジナルTシャツまで製作しました。

行事のほとんどは、日本人研修員同士でマメに連絡し合いながら（実況中継レベルに連絡し合う日もありました。）、お互いに協力して対応してきたのですが、行事を一つ一つ終える度に、日本人研修員同士の絆も深まっていきました。大人になってから、このように濃密な時間を共に過ごす機会なんてそうそうない中で、大切な仲間が増えていく実感がありました。

毎日が忙しくもとても充実していて、本当に楽しかったので、あっという間ににぎやかな5週間が過ぎてしまいました。



4 おわりに

研修所内ではW i f i に接続できるため、海外研修員は、出先から研修所に戻ると必ず写真を送り合います。文化的な違いを感じたのは、海外研修員は写真を選んで送らないことです。つまり、ピンボケした写真でも構わず、全て送ります。しかも尋常でないほどの枚数の写真を全て送ります。一回につき、86枚が送られてくるのは稀ではありません。さらに、研修員同士の連絡手段として、特定の通信用アプリを利用していたため、送られてくる写真を開封すると、自動的に自己のスマートフォンに全て納められることになっていました。複数人から、毎回数十枚の写真や動画が、ほぼ毎日送られてくるので、機種変更したばかりだった私のスマートフォンでしたが、容量がかなり埋まりました。

当時は、「せめて選んで送ってきてほしい・・・」と思ったものですが、今は遑って削除することもできず、たとえピンボケした写真であっても、隠し撮りされたような写真であっても、一枚一枚が大切な思い出のワンシーンに思えます。毎日がとにかく忙しくて、さらに日常会話は英語で過ごしていたので（日本人同士の会話さえ、研修後半には英語となっていました。）、研修最終日前日のグループワーク発表がようやく終わると同時に、途端に寂しくなり、最終日の海外研修員見送りの際は、涙を流す海外研修員も女性には多く、私も自然と涙があふれました。

日本人研修員だけで研修後の意見交換会に参加した後、タクシーに乗って立川駅に着いたとき、最後に5人で写真撮影をしたのですが、「もう写真の中に海外研修員が入り込んでいることもないんだね。」「もうその辺で写真撮っている〇〇さんはいないんだね。」等という会話とともに、たちまち現実の世界に引き戻されたような気持ちになりました。

色々なことがあった5週間でしたが、どれも良い思い出です。実は、このように感じているのは、私だけではなく、研修が終了してから3週間経った今でも、通信用アプリを通じて互いに連絡し合ったり、励ましたり、写真を送ったり（さすがに数十枚レベルの写真の送付はないですが・・・）しています。今朝にも巨大台風の接近を目前とした日本のニュースを知った海外研修員たちが、日本人の安全を気遣う連絡をくれました。

たった5週間かもしれないけれど、とても濃い5週間だったので、世界中に多くの強い絆で結ばれた友達ができました。ブラジル、スリランカ、マレーシア、インドネシア、パキスタン、ケニア、パナマ、タジキスタン、ラオス、ミャンマー、ナイジェリア、香港、韓国、サモア、ソロモン、タイからの仲間たちと、日本全国（札幌、横浜、大阪、鹿児島）から集まった仲間たちと、この研修で出会うことができ本当に良かったです。このような機会

に恵まれて、私は幸運だと思います。そして、世界各地の友達を訪ねて各国に旅行する楽しみが増えたので、今からワクワクしています。

最後に、UNA FE Iの所長を始め、教官ほかスタッフの皆様にも、とても親切にさせていただき、心から感謝を申し上げます。

本当にありがとうございました。

